

研究ノート

話劇「明朗的天」のなかの顕微鏡

Microscope in the Stage Play ≪ MINGLANG DE TIAN ≫

坂 野 学

SAKANO Manabu

〔抄録〕 曹禺の話劇「明朗的天」のラストシーンで主人公の手に握られる顕微鏡の意味をさぐるものである。舞台劇で顕微鏡を特別な意味をもたせている作品、「仮面」「法西斯細菌」を比較の材料として、それぞれが異なる扱い方をしていることを明らかにした。そのうえで、「明朗的天」の顕微鏡の顕示は、「法西斯細菌」の顕微鏡の消失の反転を意図したものであり、それぞれが置かれた政治情況の違いがそうさせていることを結論づけた。

〔キーワード〕 中国話劇 曹禺 夏衍 朝鮮戦争 細菌戦

はじめに

曹禺の話劇「明朗的天」の最終場面は、主人公の医学博士凌士湘が、朝鮮戦争の戦場に出発するにあたって、「私の顕微鏡、これは私の銃だ！」と宣言し、「（振り返り、顕微鏡をとりあげて）よし、莊政委、私たちも行きましょう」と言って幕が下りるというものだ。¹ なんとも勇ましいシーンなのだが、個人的にはまったくここに響いてこない。要請された創作意図からすれば、歓喜とともに昂揚すべきものなのだろうが、違和感を取り去ることができない。むしろ、イプセンが「人民の敵」を発表するに当たってその出版元に「これを喜劇と呼ぶべきか、劇と呼ぶべきかまだ迷っています。喜劇的性格にあふれているけれども、主題は真面目なものだからです」と書き送ったことを想起してしまう。²

いったいこれはどういうことなのか、小論では顕微鏡が重要な意味をもって演出されているとみられる他の劇作品とくらべてみることによって、その意味を確かめ、自らの疑問にとりあえずの答を導き出したいと思う。

一 森鷗外「仮面」（1909）³

独幕劇「仮面」は、森鷗外が創作した唯一の現代劇であり、それ以降の日本における近代劇の祖型になったものとされる。ここで祖型というのは、対話をうまく組み合わせることで、芝居を成立させる形式をいう。⁴

小論ではこのような理論上の論点には深入りしない。劇中の杉村博士と学生山口との間で交わされるニーチェの思想については、鷗外自身がこの作の2年後に書いた「妄想」の中で、常識をくつがえすような勢いが面白いので借用したまでというような旨で否定的に述べているのだから。⁵

博士と学生の間、および博士と学生の姉金井夫人の間で交わされる対話がつくり出す芝居の妙味というものよりも、むしろ関心を持ってしまうのはその間に挟み込まれた、植木屋佐吉の事故死とその死を前にした佐吉の若妻みねの動揺をみせない毅然とした所作にこそある。

「妄想」の中で、鷗外は自身を「洋行帰りの保守主義者」と名乗っている。博

士と学生は西欧近代主義を強くもつが、植木屋とその妻の出来事は、日本の伝統社会の礼風をそれに対比させて、少しも見劣りがしない。いや、むしろ死を前にしての態度としては潔く立派であり、博士・学生らの方がうろたえているかのように見える。そのうろたえを見せまいとするのが「仮面」ということになるわけだが。

さて、小論でとりあげる顕微鏡のことだが、劇中では、危篤状態の植木屋佐吉への対応の間、学生山口は杉村博士から博士の仕事場に入っているように言われる。山口はその部屋で博士が書いた自分のカルテに「結核、陽性」とあるのを発見し愕然とする。一人になって落ち着きたいと病院を去ろうとする山口を博士は呼び止め、「君のその不安の状態を直に直してあげるから」と言って顕微鏡を取り出すことになる。

（学生腰を掛け、俯向く。博士静に右手の戸を開け入り、暫くして顕微鏡標本を入れたる畳と顕微鏡写真一枚とを持ち出で、卓の上に置き、再び入りて顕微鏡一台を持ち出で、見物に背を向けて、担架と卓との間に立ち、顕微鏡を窓に向けて据ゑ、鼻目金を振落し、油浸装置を調べ、畳を引き寄せ、中より厚紙製の標本挟を四五枚出し、一枚を選び分け、それより標本を一つ取り、顕微鏡に掛け度を合せ置き、写真をその側に置き、学生に。）

これを見てくれ給へ。⁶

顕微鏡標本と顕微鏡の扱いがこと細かくト書きに書かれているが、巻末の解題によれば、鴎外は杉村博士を演じる役者について、「落付いた腹のある人にして、^(ママ) 顕微鏡の取扱ひだけは大いに研究して貰ひたい」と要求したという。⁷「見物に背を向けて」とあるように、たとえこまかな演技の一部が観客の視野に入らなくなっても、一連の行為は粛々と進められなければならないのである。

さらに、観客には見えることのない顕微鏡レンズがとらえている対象物（結核菌）をことばによって正確に説明する。

博士。 先にその写真と標本に張ってある札紙とを見給へ。写真には千八百九

十二年十月二十四日の日附がある。標本には昨日の日附がある。(学生写真と標本札紙とを見る。)それから標本を見給へ。(学生顕微鏡を覗く。)細菌が見えるだらう。その糸を刻んでばら蒔いたやうなのが結核菌だ。青い地に菌が赤く出てゐる。Ziehl Neelsen (チイルネエルゼン) の法といふので、今は大抵これで染める。(学生両方を見競ぶ。博士の語調重く緩になる。)君に秘密を言つて聞せよう。(学生顕微鏡を離れ、博士と向き合ひて立ち、耳を欹つ。)君はその写真の結核菌が誰のだと思ふ。(間。)そりゃあおれのだ。⁸

上記の箇所は「仮面」劇脚本の他の部分にくらべて圧倒的に細かく表現されている。たとえば植木屋佐吉に対処する緊張した場面など、杉村博士は何もしていないのに等しいほどなのだ。

いったいこの過剰な細かさは、劇にとって何なのであろうか。1892年10月24日の日付など、観客にとっては何か日付が書いてあるのだということ以上に意味をもつことは本来ない。それにもかかわらず鴎外がこの細かな日付にこだわったのには理由があるはずだ。恐らく、よく言われるところの鴎外結核死亡説が、この表現を支えているのであろう。

森於菟が言うように、1892年10月24日は鴎外が自身の結核を発見した日であるはずだと考えるしか、この表現のあり様を説明できまい。⁹ト書きの内容は、鴎外自身が極度の不安を抱えながら顕微鏡を覗いた時の再現であり、標本写真はそのとき見たものをできるだけ正確に伝えようとする衝動の現れであろう。

この顕微鏡にまつわる部分が「仮面」劇のストーリーを超えて、生々しく感得されるのは、上のような理由である。「仮面」の杉村博士を通して、鴎外は自分の「仮面」を取り去ってみせたのだ、ということができる。

どうしてそんなことをしたのか。不治の病と言われる結核を完治させた、あるいは完治できるはずだ、という医科学への強い信頼の表明であろう。「仮面」を書いた2年後の「妄想」は晩年を想定して、自らのやってきたことの否定めいたことばかりが綴られているが、哲学や文学が動揺するのを見ているのと同時に、「重い石を一つ一つ積み重ねて行くやうな科学者の労作」を評価している。¹⁰

人間の大厄難になっている病は、科学の力で予防もし治療もすることが

できるようになって来た。種痘で庖瘡を防ぐ。人工で培養した細菌やそれを種えた動物の血消で、窒扶斯を防ぎ実扶的里を直すことができる。……。結核も、ツペルクリンが予期せられた功を奏せないでも、防ぐ手掛りがないこともない。……。Elias Metschnikoffの楽天哲学が、未来に属している希望のように、人間の命をずっと延べることも、あるいはできないには限らないと思う。¹¹

「仮面」のなかの顕微鏡の表現の根底には、鷗外の科学に対する強い信頼があると言えよう。

二 夏衍「法西斯細菌」（1942）¹²

夏衍が福岡戸畑の明治専門学校電機科で学ぶことになったのは1921年、鷗外が亡くなる1年前であった。ロシア革命や第一次世界大戦を経て、世界情勢は大きく変わり、中国では共産党が成立した年でもあった。夏衍の関心は政治や文学に移り、1923年には「社会科学研究会」に参加して、日本の左翼系学生とともに社会主義に関する書物を読むようになった。その翌24年の孫文の訪日に際しては留学生代表として謁見し、孫文の勧めで中国国民党に加入している。その後、25年には明治専門学校を卒業して、九州帝国大学工学部冶金学科に進んだ。ただし、九大にはほとんど通わず、東京で中国革命活動に奔走するが、蒋介石の政変により帰国することになり、上海で中国共産党に入党している。

その後左翼作家連盟に参加し、映画・演劇・評論において顕著な活躍をみせた。

1941年に太平洋戦争が始まった時は、香港で活動していたが、香港が陥落後は桂林に逃れ、42年桂林で「法西斯細菌」を完成させ、2ヶ月後には重慶で上演された。¹³

「法西斯細菌」という5幕劇の題名は「ファシズムという細菌」「ファシズムが細菌だ」ということを意味している。

医学博士俞実夫一家が1931年東京から上海・香港を経て1942年桂林へ逃れるま

での経過を、日本留学仲間との交流を通じて描く「抗日戦」劇というふうに色分けできるが、俞実夫の妻を日本人に設定しているためもあって、「抗戦」意識を昂揚させるような劇にはなっていない。

はじめに一家の移動をもとにしてざっと劇の流れをみておくと、俞実夫は中国で医学を学んでから東京に来て、1931年にはある研究所に勤務している。日本人女性との静と結婚し娘と三人で借家住まいをしている。このたび、黒熱病の研究によって日本の文部省から医学博士の学位を得た。日本留学中の友人たちからお祝いされるよろこびの中で、日中関係の雲行きは中国東北地方から怪しくなってくる。満州事変がはじまると、俞実夫は上海自然科学研究所に移りチフスの研究に加わる。さらに日中全面戦争に発展すると、上海から英国領の香港に居を移し、病院に勤務するかたわらで、住居とする部屋とは別に実験室を設けて、そこに双眼式顕微鏡を置いて独自に研究を継続した。太平洋戦争が始まると、香港にも日本軍が侵入するようになり、ある日ついに俞の自宅にも三人の日本兵が押し入り、俞の実験室を荒らしたうえ顕微鏡を持ち去ろうとした。錢裕は我慢できず日本兵の持つ顕微鏡につかみかかって取り返そうとして殴り倒され、さらにあとを追いかけて無慙にも撃ち殺されてしまう。実験道具を奪われ荒らされてしまった俞一家は、陥落した香港を去って、桂林に避難することになる。桂林ではマラリアにやられてすっかり憔悴した俞実夫だが、錢裕の遺志を尊重して自分の研究は一時やめて、貴陽の病院で臨床医として負傷兵や難民の救済に従事することでファシズム勢力と戦うことを決意する。

さて、この劇のなかで、顕微鏡ということばは第一幕から、俞実夫と友人たちの議論の中にしばしば登場していた。友人たちは俞実夫に、顕微鏡で微生物の世界ばかり見ていないで、現実の世界を見るべきだとしきりに忠告し、それに対して俞実夫は、微生物が世界を構成しているのだから、微生物を研究することが世界を理解することになると反論するのが常だった。友人たちはさらに、顕微鏡が俞実夫のものの見方を謬らせているとも批判し、俞とのあいだに論議が絶えることはなかった。

なかでも、俞実夫の研究以外に関心を示さず、家に新聞を持ち込むことさえ禁止する方針に真っ向から反論して止まないのが香港にやってきた音楽家志望の若

者錢裕で、彼はアメリカの細菌学者ジンサーの書いたものを読んで、ファシズムがはびこる世界を科学はよくすることはできない。人の頭に伝染するファシズムという細菌と戦うことの方が重要なのだと主張していた。

俞実夫の実験室に置かれた双眼式の顕微鏡は、ト書きで実験室のなかでも特に強調されてその存在が示されていた。劇中では、妻の静が俞の友人趙安濤の心配にこたえて、勤め先の病院もやめてしまい、お金をかき集めて立派な顕微鏡を買ってからは、自分の実験室にこもったきりなのだと返答している。ただその苦労の甲斐もあってか、「イギリス王立アカデミー」に論文が掲載され、国際的にも屈指の研究者としてみとめられるようになった。あともう少しでチフスの特効薬も完成というところまで来ていたのだ。

そんなときに、三人組の日本兵の狼藉にあったのである。そして俞実夫の研究の核心的な道具を取り返そうとして命を落としたのが、ずっと俞実夫の研究のあり方を批判してきた錢裕だった。

劇中で、人と人とが直接肉体ごとぶつかり合うのは、実験室のこの場面だけである。顕微鏡を奪い去ろうとする日本兵、それを追う俞実夫、日本兵から取り返そうと顕微鏡にとりすがる錢裕。結局、顕微鏡は奪い去れてしまうのだが、この場面を通じて俞実夫と錢裕（＝ジンサーの思想）の考えがつけられる。実験室に置かれた双眼式の顕微鏡を覗く行為もないし、顕微鏡のレンズがとらえる対象がどういうものであるかの説明も一切無い。にもかかわらず、この顕微鏡は劇中において最も重要な役割を果たしている。錢裕の思いを俞実夫が受け取るという、精神の伝達の道具としてドラマチックに機能したと言えよう。

桂林の地で、俞実夫は、錢裕の遺志のために、ファシズムという細菌を撲滅する活動を実際に行うため、自分は貴陽に行こう、と決意する。そのとき、「眼を閉じれば、錢裕がいつも自分に投げかけていた優しい眼が見えるようだ、そしてあの日本兵の気を違えたような顔つきも見えるようだ」と香港での出来事を吐露しているのだ。¹⁴

なお、夏衍は1942年10月17日の上演に当たって、「ジンサー教授の『ネズミ・シラミ・歴史』『詩よりももっと真実なこと』という文章を発表している。

そこには、次のようなことが引用されている。

「ファシズムが撲滅されなければ、世界の一切の衛生・予防、医療という科学はすべてただの空しいことばでしかない。科学は民主自由の土地にあってこそ、そこではじめて根付き育つことができるのだ」¹⁵

劇中で銭裕が引用するジンサー教授のことばは、そっくり夏衍自身が感動して受容れたことばであることがわかる。

三 曹禺「明朗的天」¹⁶

「明朗的天」は、朝鮮戦争中に思想改造運動が行われていた頃に執筆がなされ、休戦後に現在通行する3幕形式が完成した。休戦を対米戦の勝利とみなす当時の公的立場からすれば、創作中の背景には強大国アメリカによる侵略戦争を防衛した勝利に歓喜する雰囲気が色濃くあったことは間違いない。

曹禺が「明朗的天」を創作するに当たって、前節二で言究した夏衍の「法西斯細菌」を強く意識したであろうことは容易に想定される。しかし、曹禺が「法西斯細菌」について触れた文章は現状では見られない。夏衍の作品を常に重視してきたと言う曹禺なのだが、「法西斯細菌」にまつわるものはないのである。

「法西斯細菌」の主人公俞実夫は医学博士で病原菌を研究しているのに対して、「明朗的天」の凌士湘も医学博士で細菌学研究的教授である。そして一方は日中戦争、もう一方は朝鮮戦争とその規模は異なりながらも戦争のただ中にあるから、設定上両者のドラマにおける展開が似てくるものであることは理解できる。少なくとも、設定した主人公にあっては意図せざる類似点がでてくることもありえることを認めておこう。

そのうえで、あえて類似する点をあげておけば、
外国で研究経験がある。俞は日本、凌はアメリカ。

帰国後も外国の組織で研究をつづけた。

両者とも科学（医学）研究一筋で、他のことに関心がない。

両者とも科学者は誰もが科学が第一だと考えているものだと信じている。

両者とも自分に思想の売り込みを（宣伝）するのを嫌う。

両者とも防疫関連の論文で国際的な評価を受けた。

しかし、「明朗的天」は主に解放後にアメリカから接收した医学学校つきの総合病院が舞台であり、主人公の性格や経歴をのぞけば展開する出来事は全くことなるものである。

解放前のアメリカ人院長が起こした事件と失明の危険にある患者に対する困難な治療がドラマの軸になり、事件の解決と治療の成功の足取りとともに、病院内の思想改造が成功裏に進展してゆくというのがおおまかな筋立てである。

さて、問題としている顕微鏡のことであるが、それが現われるのは第2幕第1場の冒頭ト書きの場面説明においてである。建国初めから、1952年7月までの政治を中心とした世の中の流れと、この医院内の意識変化がながながと説明された後に、第1場の場面となる凌士湘の自宅の応接室の様子がひとわたり説明されていくが、関連する部分は、

窓の近くに風格のあるマホガニーの机があり、その上にはいろいろなもの
がいっぱいに置かれている。卓上スタンド、ラジオ、凌士湘の雑誌や顕微
鏡、切片などなどだ。・・・¹⁷

ここでは、顕微鏡は特に重視される器具ではなく、その他のものといっしょに机の上におかれているにすぎない。この点では、「法西斯細菌」の双眼式の顕微鏡の扱いとはかなり異なる。

これ以降、しばらく顕微鏡は一切でてこない状態が続く。再び現われるのは、最終の第3幕第2場に入り、治療手術は成功し、事件もほぼ解決したとみなされ、いよいよ凌士湘が朝鮮戦争に参加するために出発するという大詰を迎えてからである。

ここから突然、顕微鏡が参軍にあたって持っていく荷物のひとつとしてドラマの中心になっていく。（以下には引用が長くなるが、「顕微鏡」という語が出てくる場面を全てひろいあげておくことにする）

凌木蘭 （荷物を見て）ほう。すっかりまとめおわったのね。ありがとう、袁

ねえさん。

袁仁輝 まだ凌先生の顕微鏡がのこっているの。先生の大事なものだから、あなたがやってね。昌荃、私は下におりるわよ。¹⁸

袁仁輝、何昌荃階下におりる。凌木蘭は凌士湘の顕微鏡を拭いている。そとに車の音がする。凌士湘外から上がってくる。彼は一晚眠らず、反細菌戦展覧会で張り詰めて各種の展示物を閲覧して、いま疲れて家に戻ったのである。

凌木蘭（よろこんで）お父さん、お帰りなさい！仕事は終わったの？（凌士湘のレインコートを脱がしてやる）

凌士湘 終わった。

凌木蘭 みんなお父さんを見送るのに待っているのよ。

凌士湘 ほう。

凌木蘭 （たのしそうに）お父さん、宋おばさんから手紙がきているわ。もうお父さんが朝鮮に行くことを知っていて、前線で歓迎してくれるって言っているのよ。（凌士湘に手紙を渡す）

凌士湘手紙を読み終わって何も言わず。

凌木蘭 どうしたの、お父さん、疲れたの？

凌士湘 （手紙をそばに置いて）顕微鏡は戻しておきなさい、もう荷造りしなくていい。（立ち上がって、旅行カバンに入れた本や生活用品をひとつひとつ取り出して机の上に置いた）¹⁹

凌士湘 （長くため息をついて） 今日になって、これまでどんなに力を無駄にしたのかがやっとわかった。（顕微鏡をなでながら）この顕微鏡はむだに私と30年とともにあった。私は正しく使ってこなかったと言うべきだろう。今回、朝鮮に行くことになって、正しく祖国のために行う時が来たのだ、この顕微鏡が正しくその力を発揮することになるだろうと知った。しかし、もうおわりだ、おわったのだ！（顕微鏡を押しのける）²⁰

凌士湘は昨夜、東北から送られてきたアメリカが散布したペストに感染したネズミを見て、それが凌士湘の実験成果を使用したネズミだとわかった。自分の研究がアメリカの細菌戦に利用されてことに愕然とするとともに、他からの忠告に従わなかった自分の責任だとみなした。他の人々はアメリカの協力者だとして自分を処断するにちがいない。朝鮮に行くのは当然取りやめになると、自分勝手に判断したのである。

ところが、すぐあとに党も人民も凌士湘をアメリカの協力者だとはみなしておらず、朝鮮への参軍を歓迎しているとわかって感激することになる。そして、

莊政委 凌先生、前線の战士たちは先生たちが来るって知って、大勝利をもって先生たちを出迎えるって言ってますよ。

凌士湘 （元気をみなぎらせて）私たちも行って打ち勝とう！見てくれ、私の顕微鏡を、これは私の銃だ！

顔中真っ赤にてからせた青年警衛員登場。

警衛員 （声をはりあげて）報告いたします！凌先生はこちらでありますか？

凌士湘 （前にすすんで）私がそうですが。

警衛員、凌士湘に向って敬礼。凌士湘、ぎこちなく返礼。

みんな笑い出す。

警備員 後勤部の車がすでに到着しております。

凌士湘 （振り返り、顕微鏡をとりあげて）よし、莊政委、私たちも行きましょう。

——幕下りる、全劇終了²¹

始めて軍服を着た62歳の著名医学博士が、ついさっきまで顕微鏡とともにした30年は無駄だったと歎いたと思ったら、一転して歓喜して「顕微鏡は私の銃だ」と叫び出す。

この急激な変化は、自らの信念とは別の他者の評価によってもたらされている。党や人民がどのように評価するかに敏感に反応する人物は通常のドラマからすれば脇役の扱いであろう。喜劇ならそれでもいいが、恐らく曹禺にはそんなつ

もりはないはずである。

上記に見たとおり、結末部には「顕微鏡」の字が無造作に出てきて、恰も凌士湘の分身であるかのような扱いでもある。だが、それに相応しい役割を持たされた場面は劇中にはない。印象的な観点から言えば、最終場面を想定して、小さな波乱を拵えるために顕微鏡を利用しただけではないのかといううたがいを持ってしまう。

構成の緻密さは、曹禺劇の特長のひとつである。細かな部分部分をうまく結びつけて複雑な全体をひとつの劇的ストーリーにまとめあげる才能が劇作家曹禺の優れたところだと認めるとき、この作品においてはその才能が活かされていないとい判断される。というか、才能が空回りしているといった方が適切かもしれない。

恐らく、顕微鏡など持ち出して筋まわしをしなければよかったのである。ラストシーンは、顕微鏡などとりあげずに、「莊政委、私たちも行きましょう」で十分なはずである。「私の顕微鏡、これが銃だ」も必要ない。

どうしてこんな風に展開させたのか、それに対するこたえは、夏衍「法西斯細菌」との比較がてがかりになると考えたい。夏衍の主人公俞実夫は、ファシズムによる侵略に抵抗するために一時的に研究を断念することにした。それが顕微鏡の消失を甘受することにつながっていた。そしてそれを導いた思想として、ジンサーのことばがあったわけである。「科学は民主自由の土地にあってこそ、そこではじめて根付き育つことができるのだ」。これは、1942年当時の反ファシズム戦線にすれば誰しも同意できることばであったにちがいない。

ところが、朝鮮戦争がはじまり、思想改造が進むと、欧米のような思想はブルジョア主義として批判されるようになり、厳しさは増す一方だった。「反帝愛國」のスローガンの前に「民主自由」は捨て去るべきブルジョア思想にほかならない。

俞実夫はその消失を甘受することになったが、曹禺は「明朗的天」の凌士湘を俞とはちがうとばかりに顕微鏡を握りしめて前線へと向わせるのである。顕微鏡も研究のためではない、おそらく反米帝キャンペーンのためにほかならない。宣

伝戦の武器としての顕微鏡、そのように見ることが可能だろう。

- 1 曹禺 『曹禺戯劇全集4』 人民文学出版社 2014年 p 358～9
- 2 イプセン 毛利三彌訳 『イプセン戯曲選集 現代劇全作品』 東海大学出版
会 1997年 147頁
- 3 『鴎外近代小説集 第3巻』 岩波書店 2013年 に依拠する
- 4 楠山正雄 (1948) 「鴎外の戯曲」 『森鴎外全集 別巻』 筑摩書房 1971
年 所収 p 138、p 145
- 5 『森鴎外全集 第2巻』 筑摩書房 1971年 p 134
- 6 同3) p 90～91
- 7 金子幸代・古郡康人 同3) 解題 p 316
- 8 同3) p 91
- 9 同7) 参照
- 10 同5) p 135
- 11 同5) p 135
- 12 会林・紹武編 『夏衍劇作集 第2巻』 中国戯劇出版社 1984年に依拠す
る
- 13 会林・紹武 「夏衍年表」 会林・陳堅・紹武編『夏衍研究資料』中国戯劇
出版社 1983年所収 を参照した
- 14 同12) p 188
- 15 夏衍 「老鼠・虱子和歴史——《法西斯細菌》代跋之一」 同12) 所収
p 192
- 16 曹禺 『曹禺劇作全集4』 所収 なお所収「明朗的天」は人民文学社1957年
初版にもとづくもの。
- 17 同16) p 302
- 18 同 p 345
- 19 同 p 346
- 20 同 p 348
- 21 同 p 358～359